

アウグスティヌス『創世記逐語注解』12 巻における

霊的視像としての夢

渡邊 蘭子

序

Jacques Le Goff は「キリスト教と夢」という論文において、2 世紀から 7 世紀までのキリスト教の歴史の中で夢がどのように考えられてきたのかについてまとめている。そして、その中でアウグスティヌスの夢についての考えも概説されている。Le Goff によればアウグスティヌスは当初、同時代のアフリカの人々と同様に、神からの告げ知らせとして夢や幻が語られている自叙伝—殉教者をはじめとする人々が一人称の形で語っているもの—を読み、評価していた。しかし時を経るごとに、夢は必ずしも神からの告げ知らせや真実を知らせているものではないという思いが強くなっていったという。そして、Martine Dulaey の議論¹を参考にしながら以下のようにまとめている。

……とにかくかれにとっては、マルチヌ・デュレイがいみじくも述べたように、夢は、真実への特権的近道ではない。

この夢とその解釈の領域は、アウグスティヌスが初期中世の信仰と慣行の上に最大の影響を及ぼした分野では、おそらくない。夢にたいするためらいの(異教的およびキリスト教的な)古代的雰囲気へのかれの参加、その著作中での真の夢理論の欠如、かれの心理分析の精密さが、かれを《夢学の博士》にはしなかった。しかし、かれのきわめて慎重な態度は、初期中世の夢解釈をとりかこんでいた不信の雰囲気を助長した²。

アウグスティヌスにとって夢は真実を知るための特権的な方法ではない。アウグスティヌス以前の時代からすでに、異端との結びつき³等から、夢にたいするためらい・不信感は存在していたが、そこにアウグスティヌスも参加したのである。そして、こうしたアウグスティヌスの夢に対するきわめて慎重な態度は、初期中世に生じていた夢に対する不信感を助長させることになったという。実際、この言及の後 Le Goff は、アウグスティヌス以後の中世において夢への不安と不信が確固たるものとなり、教会側が人々の夢に対して統制を加えるようになったことを論じている⁴。

それでは、アウグスティヌスは夢をどのようなものとして考え、また、なぜ夢に対して慎重な態度を取るようになったのだろうか。本稿ではこれらの点を明らかにするため、『創世記逐語注解』12 巻を分析する⁵。この12巻は 412 年以降に書かれたとされており⁶、後期におけるアウグスティヌスの夢に対する慎重な考えがあらわれている著作だからである。

ここで『創世記逐語注解』12 巻の主題を明らかにしておこう。12 巻はそれまでの他の巻とは異なり、独特の性格を有している。1 巻から 11 巻までは創世記 1 章から 3 章の注解であるのに対し、12 巻は聖書箇所を注解しなければならないという「顧慮から解放されて、より自由に、よりじっくりと楽園に関する問題に取り組もう⁷」という意図がはじめに示されているとおり、創世記の注解ではなく、楽園についての自由な議論が展開される。「楽園に関する問題」とは、パウロが「第三の天」に引き上げられた体験(二コリ12・2-4)に関する問題である。その体験とはパウロが以下のようにして語ったものである。

私は 14 年前にキリストの内にあつた人を知っている。身体の内にあつてなのか、身体から離れてなのか、私はわからず、それは神がご存知なのであるが、その人は第三の天にまで引き上げられたのである。そのような人を私は知っている。身体の内にあつてか、身体から離れてなのかはわからず、神がご存知であるが、実際その人は楽園へと引き上げられ、語ることが人間に許されていない、言い表し難い言葉を聞いたのである⁸。

片柳によれば、ここでパウロが「第三の天」ということで楽園を暗示しているのかどうかという問題は、当時アウグスティヌスの周囲で様々に議論されていた。そしてこれは「神秘主義的体験に関わる問題で、人がこうした体験によってこの地上で楽園をどこまで経験しうるかという信仰経験の真正性を問う問を含んで」いるという⁹。その意味で、12 巻における夢の問題を考察することは、神秘主義的な体験と神の啓示の関係について、アウグスティヌスがどのように考えているのかを紐解くことにつながるのである。

ここで注意したいのは、アウグスティヌスはこの巻で夢だけを単体で取り扱っているわけではないということである。夢で見る視像は、非物体的な視像、すなわち「霊的視像」の一つとして考えられており、夢の他に、脱自状態において見られる視像等も同時に言及される。よって、以下では夢の問題だけを単体で論じるのではなく、アウグスティヌスの議論の流れに即して、夢で見る視像を含む、霊的視像全般がどのように考えられているのかをまとめることにする。

アウグスティヌスはまずパウロの「第三の天」について考察し、そこから三つの視像を区別し

ていく。そこで霊的視像よりも知性的視像がより優れていることを明らかにした後、さらに霊的視像に焦点を当ててさまざまな議論を行う。そして最後に知性的視像についての考察を行う。

1. 三つの視像

1-1. パウロが見た視像

アウグスティヌスははじめに、パウロが見たと語った「第三の天」が一体どのようなものなのかを考察していく。この点についてアウグスティヌスは綿密な議論を重ねているが、以下では簡潔にまとめることにする。

まず、この天は物体なのだろうか。しかし、もし物体であれば、そのとき魂が身体の内にはいることは確実である。ここでの前提として、アウグスティヌスは、魂が身体の内になければ物的なものは見られないし、魂が身体から離れていなければ非物的なものは見られないと考えている。そして、もしパウロが天を物体として見たのであれば、そのとき魂は身体の内にはいるはずである。しかし、パウロは「身体の内にはいるか、身体から離れてなのか」わからないと言っている。よって、天は物体ではないということになる。

それでは、天はイメージ上で(imaginaliter)見られたのだろうか。ここでの「イメージ上で」とは、物体ではなく、物体の像¹⁰として、ということである。しかし、パウロははっきりと天を見たと言っている。天を見たことについてパウロは疑っていないのである。ここから、天は単なるイメージ上で見られたものではないということになる。

それでは、パウロが見たものとは何だったのか。それについて、アウグスティヌスは以下のように述べる。「しかし、イメージ上にはなく、そのものとして見られ、そして身体をとおしてではなく見られるものとは、他のすべてに優る視像(uisio)によって見られるものである¹¹」(6,15)。パウロは身体を通して見るような物体でもなく、またイメージ上にでもなく、天そのものを見た。それは特殊な視像であり、他のすべてに優る視像であるという。この、他のすべてに優る視像とは後に説明される「知性的視像」と呼ばれるものである。

それでは、パウロが「わからない」と言ったことは何だったのか。それは自分が天を見たときに、どのようにして身体感覚から離れたのかがわからなかったということである。身体感覚から離れる仕方として二つの可能性が考えられる。一つ目は、魂が身体のうちにはいる、身

体が生きている状態で身体感覚から離れる場合である。これは起きているときでも、眠っているときでも、恍惚状態にあるときでも生じうる。二つ目は、魂が身体から完全に離れて、身体が死んだ状態になる場合である。このとき、身体は死体のようになり横になっており、魂が啓示を受けた後に、死体のようになっていた身体に戻ることになる。パウロはこの二つのうちどちらが自分に起ったのかわからなかったのである。よって、パウロは「身体の内であってか、身体から離れてなのか」わからないと述べたのである。

それでは、パウロが見た他のすべての視像に優る知性的視像とは何であろうか。それは他の視像とどのように異なっているのだろうか。ここからアウグスティヌスは、視像を区分し、各々説明していく。

1-2. 三つの視像の区別

アウグスティヌスはそれぞれの視像について説明するために「あなたの隣人をあなた自身のように愛さなければならない」(マタ22・39)の聖句を挙げる。そして、この言葉が提示された際に生じる三つの視像を説明する。まず、一つ目は目によるものである。この聖句の文字そのものが端的にただ肉眼で見られる場合の視像である。二つ目は霊(spiritus)によるものである。「あなたの隣人を…」と聞いたとき、人はそこにいなくても隣人がイメージ上で考えられるはずである。それは人間の霊において生じるような視像である。三つ目は、人間の精神の注視(contuitus mentis)によるものである。そこでは聖句において説かれている愛自体が知解され(intellecta)、注視される(conspicitur)という。これは人間の精神において生じるような視像である(6, 15)。

こうして三つの視像が挙げられた。この三つについてアウグスティヌスは、以下のようにそれぞれを名づける。

まず第一のものを物的なもの(corporale)と呼ぼう。というのもこれは身体(物体)(corpus)を通して知覚され、身体感覚によって生じさせられるからである。第二のものを霊的なもの(spiritale)と呼ぼう。というのも物体ではないが、それでも何かであるものは、霊(spiritus)と呼ばれるのが適切だからである。それは、たとえ物体に似ていても確かに物体ではなく、そこにはない物体の像(imago)であり、また知覚が生じるような眼差しでもない。そして、第三のものを知性(intellectus)による知性的なもの(intellectuale)と呼ぼう。というのも、精神による精神的なもの(mentale a mente)というのは、名前が聞き

慣れず、語るにはあまりにも不適切であるから¹²。(7, 16)

第一の物的視像は、目のように、身体で知覚され感覚によって生じるもので、通常の視像である。第二の靈的視像は、物体ではなく、そこに存在していない物体の像である。先ほどの例で言えば、そこにいないが隣人をイメージ上に思い浮かべたときの像がこれに当たる。三つ目の知性的視像は知性によって生じるものであるという。この視像は先ほどの例で考えれば、愛が知解される場合である。愛は隣人のようにイメージを伴って知解されるのではない。よって知性的視像は二つ目の靈的視像と区別されるのである。これは先ほどの例では精神による視像であると述べられていたため、精神による精神的視像と言ってもよいが、その名前はあまり聞き慣れないため、知性による知性的視像と呼ぶことにするという。本稿で注目する、夢や脱自状態において見られる像は二つ目の靈的視像に分類される。

1-3. 靈的視像と知性的視像の区別

アウグスティヌスは、一つ目の「物体」あるいは「物的」という言葉はわかりやすいが(7,17)、二つ目で言われるような「靈」(spiritus)や「靈的」(spiritale)という言葉はわかりにくく、聖書においても多様な用法があると述べる(7,18)。しかし、今回使用する「靈」という言葉の用い方はコリントの信徒への手紙二にはっきりと見いだされるという(8,19)。以下、少々長い箇所だが引用する。

そこでは極めて明瞭な証言によって靈(spiritus)が精神(mens)から区別されている。『もし私が lingua によって祈るならば、私の靈は祈っていても私の精神にとっては無益である。』つまりここでは、lingua(という言葉)によって、もし精神における知性を取り去ってしまったら、聞いたとしても誰の徳も高めず、知解もできないような、不明瞭な神秘的しるし(significationes)が語られていると考えられる。それゆえ以下のように言われているのである。『lingua によって語る人は、人間に語るのではなく、神に語っているのである。というのも、誰もそれを聞いてはおらず、靈が神秘を語っているからである。』使徒は、ここで自分が、lingua(という言葉)を、知解するために精神の眼差しが必要となるような、事物の像や類似物といったしるしとして呼んでいることを十分に示している。しかし、それらが知解されないうち、それらは靈のうちにあつて、精神のうちにはないと使徒は言っている。それゆえ、いっそう明らかに以下のように述べている。『もしあなたが靈によって賛美

したとしても、教会に来てまもない人はあなたが言っていることがわからないのに、あなたの賛美に対してどのように『アーメン』と言うのだろうか。』それゆえ、lingua—それは私たちが口の中で動かす身体の器官であるが—によって我々が話すとき、事物のしるし (signum¹³)は与えられるが、事物それ自体は明らかにはならないので、使徒は比喩的な語として、lingua という言葉をしるしが提示されること (signorum prolotionem)—すなわちそれらが知解される (intellegantur) 以前の段階—として呼んだのである。もしそれ (しるしが提示されること) に、精神に特有の知性 (intellectus) が加わったとき、啓示 (reuelatio)、知識 (agnitio)、預言 (prophetia)、教え (doctrina) が生じるのである。従って使徒は以下のように述べる。『もし私があなたがたのところに行って lingua によって語り、啓示や知識、預言、教えによって語らなければ、あなたがたにとって何の役に立つだろうか。』このことは、しるし、すなわち lingua に、知性が加わり、行われることが霊によってだけでなく、精神によって行われるときに実現することである¹⁴。(8, 19)

ここでパウロが語る lingua とは、不明瞭な神秘的しるしであり、事物の像や類似物である。それだけでは誰も理解することができず、誰の徳も高めない。それは霊のうちにある。しかし、そこに精神による知性の働きが加わったとき、そのしるしの意味が知解される。そして、ようやくそれは啓示や知識、預言や教えになるという。アウグスティヌスによれば、霊によって事物のしるしを見るよりも、精神によってその意味を知解することの方がより一層すぐれているのである。

このことは、次の箇所でも明らかである。ここでアウグスティヌスは、霊において見られる、事物のしるしである霊的視像を精神における知性によって解き明かす人の方が一層預言者であると語る(9, 20)。

従って、霊において事物の物的なある種の類似物を通してしるしが示された人に、それを知解するための精神の務めが加わらなければ、それはまだ預言ではないのである。他の人が見たものを解釈した人の方が、それを見た人自身よりも一層預言者 (propheta) なのである¹⁵。(9,20)

そこでアウグスティヌスはヨセフの例を持ち出す。ヨセフは、ファラオが見た 7 頭の雌牛と 7 つの穂の夢を解き明かした(創41・1－36)。ここでファラオが見た夢とは霊的視像であり、ヨセ

フはその視像の意味を精神における知性によって解き明かした。よってファラオよりもヨセフの方が一層預言者なのである。

そして、それよりもさらに預言者であるのは、霊的視像が与えられ、さらにその意味を解き明かす人であるという。

それゆえ、霊において事物の物的な類似物を通して、暗示された事物のしるしだけを見る人はより少なく預言者であり、それらの知解を与えられた人はより多く預言者である。しかし、最も適切に預言者なのは、霊において事物の暗示的な類似物を見ると同時に、それらを精神の活力によって知解するという、これら両方の力において卓越した人である¹⁶。(9, 20)

ここでアウグスティヌスはダニエルの夢解釈の話为例として挙げる。ネブカドネザル王は何度か夢を見て不安になり、占い師や祈祷師、まじない師、賢者を呼び出した。そして彼らに対し、まず自分の夢を言い当ててから、その上でその夢の意味を解釈するよう命じた。しかし、彼らは夢の内容が何であったかがわからなければ解釈できないと嘆いた。そこでネブカドネザル王は怒り、彼らを皆殺しにするように命じた。ダニエルも殺されそうになるが、ダニエルには王の夢の内容が神から与えられた。そして、ダニエルは王に夢の内容を話し、その上でその意味を解き明かした。ここでダニエルに与えられた王の夢の内容は霊的視像であり、その意味を知解したのは、精神における知性である。このように、霊的視像も与えられ、さらにその意味を知解することができるダニエルのような人が最も適切に預言者なのである。

1-4. 知性的視像への上昇

以上からわかるように、アウグスティヌスにおいては夢や脱自状態で見られるような霊的視像は二次的なものとして考えられている。アウグスティヌスにとって、最も優れた視像は知性的視像であり、次に霊的視像、そして最も劣った視像が物的視像である。そして、人はより劣った視像からより優れた視像へと上昇していかなければならない(11, 22)。この例としては、先ほどのダニエルがやはり挙げられる。ある日、バルタザル王は壁に文字を記す手の指を見た。その物的視像は王の霊に刻まれ、それが何かのしるしであると理解した。そして精神によってその意味を探求した。しかし、王は知解することはなかった。それに対しダニエルはそれを精神によって知解し、意味を解き明かした。精神に特有のこうした知性的視像によってダ

ニエルはやはり一層預言者なのである。このように、人は物的視像から靈的視像へ、そしてさらに知性的視像へと上昇していく必要があるという(11, 23)。

そして、アウグスティヌスはペテロが見た視像についても言及する(使10・9-43)(11, 24)。ペテロはある日脱自状態になり、さまざまな動物が入った入れ物が四隅をひもで結ばれて天から下って来るのを見、「屠って食べなさい」との声を聞いた。しかし、ペテロは清くないとしてそれを拒んだ。そのとき「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」との声を聞いた。ペテロはこの視像の意味を精神において探求した。そしてその後、異邦人であるコルネリウスの使者が家に来た際、聖霊の「一緒に行きなさい」との声を聞き、ようやくペテロは靈的視像の意味を知解したのである。すなわち、ユダヤ人だけではなく異邦人も神に受け入れられるという意味であると知解したのである。このようにしてしるしの意味を知解したのは神に助けられた精神の働きによってであるという。このようにして、人はやはり物的視像から、靈的視像へ、さらにそれを知解して知性的視像まで上昇するべきであるという。

ここまでで明らかになったアウグスティヌスの夢についての考えをまとめておく。アウグスティヌスにおいては、夢において何かを暗示する事物のしるしが与えられたとしても、それ自体が重要視されるべきではない。そのしるしの意味を精神における知性によって知解することこそが最も重要なのである。ここに、アウグスティヌスが夢において見られる神秘的なしるしへの慎重な態度がまずみとれる。次章では、靈的視像についてのさらなる考察をみていく。

2. 靈的視像

ところで、この12巻の主題としてはじめにアウグスティヌスが述べたのはパウロが見た「第三の天」であり、それは第三の視像、すなわち知性的視像である。しかし、実際 12 巻では知性的視像が詳しく論じられているわけではなく、それよりも第二の視像である靈的視像に関する議論に多くの紙幅が割かれている¹⁷。片柳は、その理由の一つとして、この靈的視像の体験が当時の多くの人々にとって真正の宗教的体験とみなされ、神の現臨として重んじられていたことに対し、アウグスティヌスが複雑な心情を抱えていたのではないかと推測している¹⁸。後に見るように、アウグスティヌスも、靈的視像の体験において善い霊を通した神的な啓示が与えられることを認めるが、他方で悪い霊が働いた場合には、人間をたぶらかし、魂を翻弄することがあることも理解していた。こうしたことから、アウグスティヌスは靈的視像の体験を重ん

じることの危険性を説き、真正な宗教的体験である知性的視像と区別するために、靈的視像について詳しく語った可能性があるという¹⁹。本章では、こうした点を踏まえつつ、アウグスティヌスが靈的視像に対してどのように慎重な態度を取っているのかを分析する。

2-1. 状態の区別

まず、アウグスティヌスは靈的視像が生じる人間の状態について以下の三つに区別する(12, 25)。一つ目は目覚めていて、魂が身体の感覚から引き離されていないときである。そのとき人は物的視像のうちにおり、物的視像と靈的視像を区別することができる。このときの靈的視像とは、そこにはない物体をイメージ上で考えることである。そのあり方としてはいくつかの場合があり、すでに知っているものを記憶から想起する場合や、知らないが靈のうちにあるものによって形成する場合、あるいは存在しないものを推測によって作り上げる場合などである。他方で、物的視像と靈的視像を区別できない状態になることがあるという。それが二つ目の状態であり、例えば、過度に思考が集中したときや、熱病によって精神が錯乱したとき、あるいは善い靈や悪い靈が魂と混合したときなどである。そのとき、物体の像(靈的視像)も物体が見えるのと同様の仕方で見えるため、実際の物体(物的視像)と物体の像(靈的視像)がどちらも見える状態になり、両者の区別がつかない。三つ目は、夢を見ている状態や脱自状態であり、そのとき魂の志向は身体の感覚から完全に引き離されている。そしてそのとき、現前する物体(物的視像)は見え、聞こえず、魂は靈的視像か知性的視像のうちにある²⁰。アウグスティヌスが次に扱うのは、二つ目および三つ目のような状態で見える靈的視像である。

2-2. 想像物／他の靈との混合の区別

二つ目および三つ目のような状態で見える場合、その視像が何も暗示していない場合と、何かを暗示している場合があるという。何も暗示していない場合、それは魂自体の想像物であり、何かを暗示しているならば、それは自分とは別の靈によるものである可能性があるという。

しかし、魂が身体感覚から完全に引き離された状態で、靈的視像が、睡眠中であれ恍惚状態の中においてであれ、物的な像によって充たされているとき、もし、見られたものが何も暗示していないならば、それは魂自体の想像物(imaginationes)である。……

しかし、何かを暗示しているならば、睡眠中に示されたのであれ、目覚めているときに示されたのであれ—そのとき存在している物体を目で見ると同時に、不在の像をあたかも目の前にあるかのように霊によって認識する—、あるいは魂が身体感覚から全く引き離された脱自状態(ecstasis)と言われる状態においてであれ、もし、他の霊の混合によって、その霊が、自らが知っていることをこの種の像を通して、混合した者に現す—混合した者自身が知解することによってであれ、他の霊が知解したことによって明らかにされるのであれ—ということが起き得るならば、それは不思議なことである²¹。(12, 26)

魂が身体感覚から完全に引き離された状態、すなわち先ほどの三つ目の状態であるが、そのとき、見られたものが何も暗示していないならば、それは魂自体が作り上げた想像物であるという²²。しかし何かを暗示している場合もある。そのときは、眠っている場合、目覚めていて物体と物体の像が同時に見られている場合、脱自状態の場合が考えられるとあり、ここでは二つ目の状態の場合と三つ目の状態の場合がどちらも言及されている。このような状態で見られた霊的視像が何かを暗示している場合は、それは他の霊の混合によって生じた可能性が考えられるという。そのとき、他の霊が、自らが知っていることを霊的視像を通して、混合した者に示す。そのとき、混合された者自身がそれを知解する場合もあれば、まず他の者によって知解されて、それによって混合された者に明らかにされる場合もある。このようにアウグスティヌスにおいて、霊的視像は魂が想像したものである場合と他の霊によって示された場合という二つの可能性がある。

この二つの場合を別の言葉で表現している箇所がある。

それ(魂自体)は霊において物体の類似物をもたらすか、あるいは示された類似物を見る。そして、もし魂がそれら(物体の類似物)をもたらすならば、phantasiae でしかないが、もし示された類似物を見るならば、それは ostensiones である²³。(20, 42)

魂が霊において物体の類似物を生じさせる場合、それは12, 26では想像物(imaginationes)と言われていたが、ここではphantasiaeと言いつけられている。そして、12, 26で他の霊が混合することによって生じるとされていたことは、ここでは物体の類似物が「示される」と表現されている。つまり魂が他の霊から何かを「示される」のである。そして、その場合はostensionesであるという。ここで注意したいのは、後者がただちに「神の啓示」として理解さ

れるべきではないという点である。後に説明されるように、別の霊が魂に何かを示すとき、その霊は善い霊なのか悪い霊なのかはわからないからである。

アウグスティヌスはここで、自分とは異なる霊によって何かが示されることを示唆したわけであるが、ここで、何かが示されることの代表的な例である、将来のことが予告される、いわゆる「予言」(diuinitio)は他の霊の助けによるのであって、魂自体の力によってではないことを強調する(13, 27)。

確かに少なからぬ人々は、人間の魂がそれ自体においてある種の予言の力を持っているという主張をする。しかし、もしそうであるならば、なぜ望んだときにつねにできないのだろうか？ できるだけよくにつねに助けられるわけではないからだろうか？ 助けられる場合は、人間によって、あるいは物体によって助けられるということはあるまいだろうか。従って、霊によって助けられるということが残る²⁴。(13, 27)

アウグスティヌスはここで、もしも魂自体に予言の力があるならば、なぜ望んだときにつねにできないのかと問う。つねにできない理由がつねに助けられるわけではないとすれば、やはり予言の際に、何かに助けられる必要があることになる。そして、助けられるという場合、他の人間や物体によって助けられるということはあるまい。よって、他の霊によって助けられるということが残るといふ。

2-3. 霊の区別

それでは、他の霊が混合するというときの、霊の種類を区別している重要な箇所を検討しよう。

もし霊につかれた人々が、ときに、現前するものの感覚から離れているものに関する真実なことを言うとしても、そんなに不思議なことではない。このことは確かにどんなものかわからないが、苦しむ霊と苦しめる霊が一つになったかのような、隠された霊の混合によって生じる。しかし、善い霊がこの視像へと人間の霊を引き寄せ、駆り立てる場合、その像は他の事物のしるしであるか、あるいは知ることが有益であるような事物のしるしであることは決して疑うべきではない。というのも、それは神の賜物だからである。悪い霊が大変静かに、身体を苦しめることなく、人間の霊に乗り移り、できることを言う場合、それ

を区別するのは非常に難しい。ある時は、真実を語り、有益なことを予言し、「光の天使のように」(二コリ11・14)と言われているように自らの姿を変え、そうして明らかな善として人間に信じられたときに自らの元へと誘惑する。この両者の霊を区別するには、使徒がさまざまな神の賜物について語ったときに、「ある人には霊を判別することが」と語った賜物なくしてはできないと思う²⁵。(13, 28)

善い霊が人間に霊的視像を示した場合、それは何かの事物のしるしであるか、あるいは知ることが有益であるような事物のしるしである。そして、それは神の賜物であるという。しかし悪い霊も、非常に静かに、身体を苦しめずに人間の霊に乗り移り、まるで天使のように真実を語ったり、有益なことを予言したりする。こうして悪い霊は人間をだまし、明らかに善なる霊であると信じられたときに、悪へと誘惑するのである。よって善い霊と悪い霊を区別することは難しく、神から特別な賜物を与えられた者でなければこの区別はできないであろうと述べる。

そして悪い霊に乗り移られたと思われる人の例を三つ挙げる(17,34-38)。ある「汚れた霊にとりつかれた人」は、家の中にいたまま 12 マイル離れたところから司祭が自分に合うために出立した時間を言い当てた。また、「明らかに錯乱した人」は、ある婦人がやがて死ぬことを予言した。また、ある性器の病を患った少年は、痛みによって気を失ったが、その際に年老いた人と少年の二人の幻を何度も見た。

2-4. 霊的視像に対する立場

こうした例のような霊的視像の体験をどのように考えるべきかについて、アウグスティヌスは自らの見解を以下のように述べる。

もしも、誰かがこれらの視像と予言の原因や方法を発見し、明確に理解できるならば、私が論じるのを期待するよりも、その人の話を聞いてほしい。しかし、私は自分が思っていることを隠さずに述べよう。学識ある人々が私を凝り固まった考えの人とあざけらないため、あるいは学識のない人々が私を教えを説く人のように受け取らないため、そして両者ともが私を知者ではなく、議論し、探求する人とみなしてくれるようにするためである。私はこれらすべての見られた像(visa)を、夢を見たときに見られる像(visis somniantium)と比較しようと思う。実際、夢が、あるときは偽りであるが、あるときは真実であり、あるときは混乱しており、あるときは平静であり、また将来に関する真実なことが、あるときは全

く類似していたり、あるいは明白に示されたりするが、あるときはおぼろげなしやいわば象徴的な語りによって予言されるように、かのすべての見られた像も同様である²⁶。

(18,39)

アウグスティヌスは上述した例のような視像や予言がどのようにして現れるのか、その原因や方法について、自分は断定することができないという。そして、自分よりもそれを明確に理解している人がいれば、その人に話を聞くようにと述べる。自分はそのことを教える人なのではなく、あくまで議論し、探求しつづける人間であることを強調する。それを踏まえつつ、アウグスティヌスは自分の考えを表明する。ここでアウグスティヌスは夢と脱自状態を対応させて考えている。夢における霊的視像は偽りであるときもあれば、真実であるときもある。また混乱しているときもあれば平静なときもある。そして、将来に関する真実なことが示されるとき、それは全く真実と類似していたり、明白に示されたりする場合もあるが、明白ではないおぼろげな仕方でのしや象徴的な語りを与えられる場合もある。同様に、夢以外で示される霊的視像も、偽りであったり、真実であったり、混乱していたり、平静であったり、真実であっても明らかな場合と象徴的な場合があったりするるのである²⁷。このように、アウグスティヌスは、夢や脱自状態において生じる霊的視像は、真実の可能性もあるが、他方で偽りの可能性があることも考慮すべきであると考えている。偽りの場合、すでに述べた内容から考えれば、魂が自ら想像したことであったり、悪い霊が魂に示したものであったりするるのである。

2-5. 知性の重要性

このように、霊的視像によって人間は欺かれる可能性がある。しかし、さらに優れた視像である知性的視像によっては欺かれないという。

しかし、物的視像や、霊において明らかにされる物体の像を通して、善い霊たちは教え、悪い霊たちは欺く。しかし、知性的視像によっては欺かれない。なぜなら、実際に存在するものとは異なるものを考える人は知解していないのであり、もし知解しているならば、それは必然的に真実なのである。というのも、他のものと区別できない類似の物体を見ても、目はなすべきことを持たない。物体から区別できない物体の類似物が霊において作られ、生じたとしても、魂の志向はなすべきことを持たない。しかし知性が用いられると、それが何を暗示しているのか、あるいはそれが何を有益なものとして教えているのかを

探求し、その結果それを発見して、その成果に到達することもあれば、それを発見せずに、ある種の有害な不注意によって致命的な誤りに陥らないように、自分を議論の渦中に留まらせる²⁸。(14, 29)

アウグスティヌスにおいて、人が何かを知解しているならば、それは必然的に真実である。もし目が本物の物体に類似した物体を見て、両者を区別できなかったとしても、そこで目はなすべきことがない。また、霊において、本物の物体と区別できない物体の類似物が生じたとしても、魂はなすべきことがない。しかし、知性が用いられると、霊的視像が何を示しているのかを探求する。そして、あるときはそこで示されている意味を発見して、成果を得る。あるときは、その意味を発見できないが、その場合でも、致命的な誤りに陥ることがないように、断定することを避け、議論し、探求しつづけるのである。

そして、物的視像や霊的視像によって欺かれたとしても、精神における知性を用いているならば、それほど害にはならないという。なぜなら、神に助けられた知性は、実際のこととは異なることを考えたとしても、魂にとって有害にならないように、分別をもって判断するからである。ここでアウグスティヌスはいくつかの例を挙げる。例えば、善い人と思われているが、内心では悪い人がいる場合、欺かれる人が害を被るのではなく、本人に破滅が来るだけである。また、夢の中で物体の類似物を真の物体であると思ったとしても、特に害はない。さらにペテロは鎖を解かれて天使に導かれた際、それを真実なものではなく、幻であると思った。しかし、そう思ったとしても何の害もなかった。また、先に述べたように、ペテロは脱自状態において、天から動物たちが下ってきた視像を見て、それを本物の動物だと思い、拒絶する言葉を語ったのであるが、やはりそれでもペテロに害はなかった。よって以下のように語られる。

従って、悪魔が物的な視像でもって惑わし、目がたぶらかされたとしても、神が自らに服する者たちに教える信仰の真理と知識(intellegentia)の健全さにおいて誤らなければ、何の害にもならない。あるいは、もし悪魔が物体の像という霊的視像によって魂をたぶらかし、実際はそうでないものを物体であると思ってしまったとしても、有害な誘いに同意しないならば、魂には何の害にもならない²⁹。(14, 30)

アウグスティヌスにおいて最も重要なことは「信仰の真理」と「知識の健全さ」、あるいは有害な誘惑に同意しないことであって、それは知性的な領域に属するものである。いくら物的視

像や靈的視像によって欺かれたとしても、知性において誤ることがなければ問題はない。そして、ここで言われている知性的なこととはキリスト教が説く信仰・真理・知識である。真実はそのにあるのであって、夢や脱自状態等において示された靈的視像に必ずしも真実が見いだされるわけではないのである³⁰。

2-6. 知性的視像

卷の終盤に差し掛かり、アウグスティヌスは知性的視像についての説明を行う(26,54)。アウグスティヌスによれば、それは靈的視像である物体の類似物からも引き離され、知性的なもの・可知的なものの領域に運ばれることで生じるものである。その領域では、「何の物体の類似物もなしに透明な真理が知覚され、どんな偽りの心象(*opinio*)による靄によっても暗くされない³¹」という。それは至福の生のようなものである。そうした至福の生には源泉があり、そこから湧き出るもののいくつか、この世に生きる人間の生に注がれるという。それが知性的視像である。それによって、人間は試練の多いこの世において、節度を保ち、勇敢に、正しく、賢く生きることができるという。こうした知性的視像は、アウグスティヌスにおいてはかなり限られたものであり、聖書において登場する視像の多くが物的視像か靈的視像である。例えばモーセがシナイ山で見た燃える柴(出3・1-15)や、契約の際に現れた煙や雷鳴(出19・16-25)は物的視像である。また、イザヤや黙示録におけるヨハネが見た視像は靈的視像である。知性的視像とはそのような視像ではなく、「人間の精神が把握しうる限りで、おぼろげにではなく、顔と顔を合わせて(*per speciem non per aenigmata*)」見られ、「口から口へ」と語られるものである。神はそのような会話にふさわしいとされた者に語る。それは神の恩恵によることである。そして、こうした知性的視像を見た者としてモーセが挙げられる(27, 54)。実際、「主は人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語った」(出33・11)とあるからである(27, 55)。そして、この巻のはじめに議題としてあげられていたパウロの「第三の天」の視像も、こうした知性的視像に属すると考えられるという³²。(28, 56)

結

以上、『創世記逐語注解』12 卷において、アウグスティヌスが夢や脱自状態等の状態で見られる靈的視像をどのように考えているのかについて分析した。アウグスティヌスにおいて靈的視像は、魂の想像物であるときもあれば、他の靈によって示されるときもある。後者の場合、

善なる霊によって真実が示されたり、有益なことが示されたりする場合—これは神の賜物である—もあれば、悪なる霊による場合もある。悪なる霊が天使や善なる霊を装って真実を示すこともあり、それは悪なる方に誘惑するものである。よって、アウグスティヌスにとって、霊的視像は必ずしも真実ではないし、また、必ずしも神の賜物ではない。こうした理由から霊的視像を慎重に扱うべきなのである。そして、アウグスティヌスが終始強調していたのは精神における知性を用いることの重要性である。すなわち、霊的視像を見ることよりも精神による知性によってその意味を知解することがより一層重要なことであり、もし霊的視像によって欺かれることがあったとしても、精神における知性を用いることで決定的な誤りを犯すことがないということである。こうしてアウグスティヌスは、神秘的な体験によって感わされるべきではなく、知性的なもの、すなわちキリスト教が説く信仰や真理、愛を確固たるものとして考えるべきであると説くのである。

本稿ではアウグスティヌスが霊的視像をどのように考えているのかについて、12巻の議論を追いながら簡単に分析するに留まった。そのため、より詳細に分析すべき点は多く残っている。その中でも特に今後考察したい点を以下に挙げる。まず一つ目は、アウグスティヌスが夢を形成する起源を魂に置き、夢を「本質的に心理的な現象に還元した」と Le Goff によって指摘されている点である³³。アウグスティヌスは確かに霊的視像の原因の一つとして他の霊を考えていたが、霊的視像の本質的な起源は魂にあると考えているという。この点については、アウグスティヌスの夢概念の特徴を捉える上で重要な点であるため今後詳しく考察していきたい。二点目は知性による知解についての考察である。アウグスティヌスにおいて、人が知解するものは必然的に真実であると語られていたが、このような知性による知解とは具体的にどのようなものなのであろうか。先行研究ではプロティノスからの影響も指摘されており、さらなる考察の余地がある。また、現世において知性的視像を持つことができるのはモーセやパウロなど、ごく少数の人間に限られているのか、それとも普遍的な人々に開かれているのか、という点も興味深い点であり、今後分析していきたい。

¹ Martine Dulaey, *Le Rêve dans la Vie et la Pensée de Saint Augustin*, Collection des Études augustinienne, Série Antiquité (EAA 50), 1973.

² Jacques Le Goff, “Le christianisme et les rêves,” in: *L’imaginaire médiéval. Essais*, Gallimard, 1985. 池上 俊一訳「キリスト教と夢」、『中世の夢』名古屋大学出版会、1992年、111頁。

³ アウグスティヌス以前のラテン世界における異端と夢との結びつきについては以下で概説されている。Martine Dulaey, “Songes-rêves,” in: *Dictionnaire de spiritualité ascétique et*

mystique, Tome XIV, Paris, 1990, pp. 1060-1061.

⁴ Le Goff, 前掲訳書、111 頁以下。

⁵ 以下の論文の *De Genesi ad litteram* XII の箇所では、『創世記逐語注解』12 巻の内容が、特に *vue* の観点から概説的にまとめられており、12 巻の議論の流れを理解する上で有用である。Goulven Madec, “Savoir c’est voir -Les trois sortes de « vues » selon Augustin,” in: Françoise Dunand, *Voir les Dieux. Voir Dieu*, Strasbourg, Presses universitaires de Strasbourg, 2002, pp. 123-139.

⁶ Bibliothèque Augustinienne, *Oeuvres de saint Augustin*, 48, 7^e série, Exégèse, *La genèse au sens littéral en douze livres*(I - VII), *De genesi ad litteram libri duodecim*, trad., introd. et notes par P. Agaësse et A. Solignac, 2000, p.31.

⁷ *Iste autem duodecimus liber ea cura expeditus, qua nos pertractandus textus sacrarum litterarum occupabat, liberius atque prolixius uersabit de paradiso quaestionem,...*

以下、『創世記逐語注解』12 巻の引用は Bibliothèque Augustinienne, *Oeuvres de saint Augustin*, 49, 7^e série, Exégèse, *La genèse au sens littéral en douze livres*(VIII - XII), *De genesi ad litteram libri duodecim*, trad., introd. et notes par P. Agaësse et A. Solignac, 2001 から行う(以下 Bibliothèque Augustinienne は BA と略す)。訳出にあたり、『アウグスティヌス著作集』(教文館)第 17 巻の片柳栄一訳を参考にした。なお括弧内の補足は投稿者による。

⁸ *scio hominem in Christo ante annos quattuordecim, siue in corpore nescio, siue extra corpus nescio, Deus scit, raptum eius modi usque in tertium caelum. Et scio eius modi hominem, siue in corpore siue extra corpus nescio, Deus scit, quia raptus est in paradysum et audiuit ineffabilia uerba, quae non licet homini loqui.* 本稿における聖書の引用は、アウグスティヌスが引用しているラテン語をそのまま訳した。なお聖書の略号は『聖書 新共同訳』(日本聖書協会)によった。

⁹ 片柳栄一「解説」(『アウグスティヌス著作集』<教文館>第 17 巻、1999 年)、225 頁。

¹⁰ これは *imagines corporum* の他にも、*imago aliqua corporalium similis, signum aliquod corporale* といった表現で表される。

¹¹ *Quod autem non imaginaliter, sed proprie uidetur et non per corpus uidetur, hoc ea uisione uidetur, quae omnes ceteras superat.*

¹² *Primum ergo appellemus corporale, quia per corpus percipitur et corporis sensibus exhibetur; secundum spiritale; quidquid enim corpus non est et tamen aliquid est, iam recte spiritus dicitur; et utique non est corpus, quamuis corpori similis sit, imago absentis corporis, nec ille ipse obtutus quo cernitur; tertium uero intellectuale ab intellectu, quia mentale a mente ipsa uocabuli nouitate nimis absurdum est ut dicamus.*

¹³ 本稿では *significatio* と *signum* をどちらも「しるし」と訳すことにする。

¹⁴ *quo spiritus a mente distinguitur euentissimo testimonio. Si enim orauero, inquit, lingua, spiritus meus orat; mens autem mea infructuosa est. Cum ergo lingua intellegatur hoc loco dicere obscuras et mysticas significationes, a quibus si intellectum mentis removeas nemo aedificatur audiendo, quod non intelligit— unde etiam dicit: qui enim loquitur lingua, non hominibus loquitur, sed Deo; nemo enim audit, spiritus autem loquitur mysteria—satis indicat eam se linguam hoc loco appellare, ubi sunt significationes uelut imagines rerum ac similitudines, quae ut intellegantur indigent mentis obtutu. Cum autem non intellegantur, in spiritu eas dicit esse, non in mente: unde apertius ait: si benedixeris spiritu, qui subplet locum idiotae quomodo dicit <<amen>>, super tuam benedictionem, quandoquidem nescit, quid dicas? Quia ergo etiam lingua, id est membro corporis, quod mouemus in ore, cum loquimur, signa utique rerum dantur, non res ipsae proferuntur, propterea translato uerbo linguam appellauit quamlibet signorum prolationem, priusquam intellegantur: quo cum intellectus accesserit, qui mentis est proprius, fit reuelatio uel agnitio uel prophetia uel doctrina. Proinde ait: si uenero ad uos linguis loquens, quid uobis prodero, nisi loquar uobis in reuelatione aut in agnitione aut in prophetia aut in doctrina? Id est: cum signis, hoc est linguae accesserit intellectus, ut non spiritu tantum, sed etiam mente agatur quod agitur.*

¹⁵ Proinde, quibus signa per aliquas rerum corporalium similitudines demonstrabantur in spiritu, nisi accesserat mentis officium, ut etiam intellegerentur, nondum erat prophetia;

magisque propheta erat, qui interpretabatur, quod alius vidisset, quam ipse qui uidisset.

¹⁶ Minus ergo propheta, qui rerum, quae significantur, sola ipsa signa in spiritu per rerum corporalium imagines uidet, et magis propheta, qui solo earum intellectu praeditus est; sed et maxime propheta, qui utroque praecellit, ut et uideat in spiritu corporalium rerum significatiuas similitudines et eas uiuacitate mentis intelligat,...

¹⁷ Solignacによれば、27節から49節の部分は、靈的視像の中の、特に予言的な視像の原因と価値についての「長い余談」がなされており、はじめの原稿に付け加えられた可能性があるという(BA 49, pp. 568-569)。

¹⁸ Agaësseによれば、413年頃、アウグスティヌスは幻視の性質や様式の区別について頭を悩ませていたという。そして実際、当時何人かからこうした問題について尋ねる書簡を受け取っていたという(BA 48, p.31.)。

¹⁹ 片柳、前掲書、226頁。

²⁰ 靈的視像が見られる原因について語り、身体の場合と靈の場合で区別して説明している箇所もある(18, 41)。身体が原因の場合としては、まず夢を見ることがあげられる。眠ることは人間にとって身体から生じることだからである。夢以外の場合としては、何らかの身体の不調で感覚が乱されるときが考えられる。例えば、熱病による精神錯乱や、病気によって意識不明となった場合などである。それに対し、原因が靈にある場合というのは、健康な身体を持ちながらも脱自状態になって物体と物体の類似物を同時に見て区別できない場合や、身体的感覚から完全に引き離されて、靈的視像だけを見る場合である。そこでは悪い靈や善い靈が働いている場合が考えられる。

²¹ Sed cum spiritalis uisio penitus alienato a sensibus corporis animo imaginibus corporalium detinitur siue in somnis siue in extasi, si nihil significant, quae uidentur, ipsius animae sunt imaginationes, sicut etiam uigilantes et sani et nulla alienatione moti multorum corporum, quae non adsunt sensibus corporis, cogitatione imagines uersant. Verum hoc interest, quod eas a praesentibus uerisque corporibus constanti affectione discernunt. Si autem aliquid significant, siue dormientibus exhibeantur siue uigilantibus, cum et oculis uident praesentia corpora et absentium imagines cernunt spiritu, tamquam oculis praesto sint, siue illa quae ecstasis dicitur alienato prorsus animo a sensibus corporis, mirus modus est, si commixtione alterius spiritus fieri potest, ut ea quae ipse scit, per huiusmodi imagines ei, cui miscetur, ostendat, siue intellegenti siue ut ab alio intellecta pandantur.

²² ここで、二つ目の状態で見ることが考えられていないが、その理由は特に語られていない。

²³ spiritu corporalium similitudines agit aut intuetur obiectas. Et si quidem ipsa eas agit, phantasiae tantum sunt, si autem obiectas intuetur, ostensiones sunt.

²⁴ Nonnulli quidem uolunt animam humanam habere uim quandam diuinationis in se ipsa. Sed si ita est, cur non semper potest, cum semper uelit? An, quia non semper adiuuatur, ut possit? Cum ergo adiuuatur, numquid a nullo aut a corpore ad hoc adiuuari potest? Proinde restat, ut ab spiritu adiuuetur.

²⁵ Non sane mirum est, si et daemonium habentes aliquando uera dicunt, quae absunt a praesentium sensibus: quod certe nescio qua occulta mistura eiusdem spiritus fit, ut tamquam unus sit patientis atque uexantis. Cum autem spiritus bonus in haec uisa humanum spiritum adsumit aut rapit, nullo modo illas imagines signa rerum aliarum esse dubitandum est, et earum, quas nosse utile est; Dei enim munus est. Discretio sane difficillima est, cum spiritus malignus quasi tranquillus agit ac sine aliqua uexatione corporis adsumpto humano spiritu dicit quod potest. Quando etiam uera dicit et utilia praedicat, transfigurans se, sicut scriptum est: uelut angelum lucis, ad hoc ut, cum illi in manifestis bonis creditum fuerit, seducat ad sua. Hunc discerni non arbitror nisi dono illo, de quo ait apostolus, cum de diuersis Dei muneribus loqueretur: Alii diiudicatio spirituum.

²⁶ Istarum uisionum et diuinationum causas et modos uestigare si quis potest, certoque comprehendere, eum magis audire uellem quam de me expectari, ut ipse dissererem. Quid tamen putem, ita ut nec docti me tamquam confirmantem derideant, nec indocti tamquam docentem accipiant, sed utrique disceptantem et quaerentem potius quam scientem, non occultabo. Ego uisa ista omnia uisis conparo somniantium. Sicut enim aliquando et haec

falsa, aliquando autem uera sunt, aliquando perturbata, aliquando tranquilla, ipsa autem uera aliquando futuris omnino similia uel aperte dicta, aliquando obscuris significationibus et quasi figuratis locutionibus praenuntiata, sic etiam illa omnia.

²⁷ アウグスティヌスはここで、脱自状態において霊的視像が現れるという非常にまれなことについて、人はその原因を探りたがるが、日常的なことの中にも、原因が深く隠された不思議なことがあるはずであるのに、人がそれらの原因については探らないことを指摘する。例えば、睡眠中に人間が夢を見ること自体、不思議なことである。さらには、見ざめている人が、肉眼で見た物体について、その物体の像を自らのうちに非常に容易に作り出すことも驚くべきことであるという(18, 39;40)。

²⁸ Tamen et per corporalem uisionem et per imagines corporalium, quae demonstrantur in spiritu, et boni instruunt et mali fallunt. Intellectualis autem uisio non fallitur; aut enim non intelligit, qui aliud opinatur quam est, aut si intellegit, continuo uerum est. Quid enim faciant oculi non habent, cum simile corpus uiderint, quod ab alio discernere non possint, aut quid faciat animi intentio, cum in spiritu facta fuerit corporis similitudo, quam non ualeat distinguere a corpore. Sed adhibetur intellectus quaerens, quid illa significant uel utile doceant, et aut inueniens ad fructum suum peruenit aut non inueniens in disceptatione se tenet, ne aliqua perniciose temeritate prolabatur in exitiabilem errorem.

²⁹ Quapropter et cum uisis corporalibus diabolus fallit, nihil obest, quod Indificantur oculi, si non erratur in ueritate fidei et intelligentiae sanitate, quae docet Deus subditos sibi. Aut si ludificet animam spirituali uisione imaginibus corporum, ut putet corpus esse, quod non est, non aliquid obest animae, si perniciosae suasioni non consentiat.

³⁰ Dulaey, 1990, op. cit., p. 1063; Dulaey, 1973, op. cit., p. 147.

³¹ ubi sine ulla corporis similitudine perspicua ueritas cernitur, nullis opinionum falsarum nebulis offuscat,...

³² Solignacによれば、議論はさまざまあるが、アウグスティヌスは完璧な脱自状態において、神の完全な視像を持っていた人物はモーセとパウロだけであると考えているという(BA 49, p. 580)。

³³ Le Goff、前掲訳書、109-111 頁。